



TITLE:

対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴

AUTHOR(S):

早津, 恵美子

CITATION:

早津, 恵美子. 対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴. 言語学研究 1987, 6: 79-109

ISSUE DATE:

1987-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87929>

RIGHT:

対応する他動詞のある 自動詞の意味的・統語的特徴

早津恵美子

1 はじめに

1. 1 目的

日本語の自動詞は、対応する他動詞の有無という観点から二つの類に分けられる。一つは、「ある」や「そびえる」のように、対応する他動詞のない自動詞であり、いま一つは、「倒れる」や「曲がる」のように、対応する他動詞（「倒す」や「曲げる」）のある自動詞である。各々の数は、例えば川瀬他（1986）などを参考に350語の（基本的な）自動詞を選ぶと、そのうち約180語には対応する他動詞がなく、約170語には対応する他動詞があるという分布を示す（注1）。

では、ある自動詞が対応する他動詞をもつか否かは、個々の動詞に個別の語彙的な問題、全く予測のつかない偶然の現象なのだろうか。本稿は、対応する他動詞をもつ自動詞の意味的・統語的な特徴について考察し、ある自動詞に対応する他動詞があるか否かは決して偶然の現象ではないことを明らかにしようとするものである（注2）。

1. 2 自動詞、他動詞、自他対応

考察にはいる前に、「自動詞」、「他動詞」、「自他対応」という語について簡単に触れておきたい。

1. 2. 1 自動詞とは、他動詞とは

日本語の動詞を自動詞と他動詞に分類することについては、山田（1908）のような否定論があるものの、何らかの定義に基づいて動詞の下位分類としての自動詞と他動詞を認めることが広く行われている（三矢 1908、松下 1930、三上 1953、奥津 1967 など）。本稿も後者の立場にたつものであり、ある動詞が自動詞であるか他動詞であるかの認定は奥津（1967）などで示されている基準に依拠することにす

る。すなわち、目的語としての「を」格名詞をとる動詞を他動詞とし、それ以外の動詞を自動詞とするという基準である。それによると、次の(1)の「山」は目的語としての「を」格名詞であるから「ながめる」は他動詞とみなせるが、(2)の「山」は目的語としての「を」格名詞ではないから「越える」は自動詞とみなすことになる。なおこの(2)の「を」格は、奥津で「移動格」とされ、寺村(1982: 103)で「通りみち(通過点)」とされているものである。

(1) 山をながめる。

(2) 山を越える。

この基準に基づくことにより、松下(1930)の基準では「他動性の動詞」とされる「歩く」、「飛ぶ」などや、三上(1953)の基準では他動詞とされる「ほえる」、「とびかかる」などを本稿では自動詞とみなすことになる。

自動詞、他動詞の認定に関してさらに次の点に注意しておきたい。一点は、「切れる」のように、他動詞「切る」の可能形と同一形態をとるものを独立の自動詞と認めるかどうかという問題である。他に「割れる、破れる、折れる、焼ける、裂ける、碎ける」なども同様である。寺村(1982)のように、これらを独立の自動詞と認めず単なる可能形とみなす立場もある。しかし本稿では、阪倉(1974)、水谷(1982)などと同じく、これらを独立の自動詞と扱って他動詞との間に対応を認める立場をとる。もう一点は、「飛ばす」のように、自動詞「飛ぶ」の使役形と同一形態をとるものを独立の他動詞と認めるかどうかという問題である。他に「乾かす、動かす、沸かす」なども同様である。これらについても独立の他動詞と認めない立場もあるが、本稿では独立の他動詞と扱って、自動詞との間に対応を認める立場をとる(注3)。

1. 2. 2 自他対応とは

動詞のうちに、形態的に対をなすとみなしうる自動詞と他動詞が存在することは古くから指摘されてきているが(三矢 1908、佐久間 1936、望月 1944 など)、自動詞と他動詞が対応するとみなす基準は必ずしも明確にされていなかったように思われる。本稿では、自動詞と他動詞との間に形態的・意義的・統語的な対応が成り立つ場合にのみ、その自動詞と他動詞が対応する、すなわち両者の間に自他対応が成り立つとみなすことにする。これは奥津(1967)、西尾(1978, 1982)、須賀(198

6) などと同様の立場である。詳しくは、早津 (1987)を参照されたいが、「統語的な対応」とは次のような関係、すなわち自動詞文の主語が、(形態的・意義的に対応する他動詞による) 他動詞文の目的語であるという関係をいう。

(3) a. 針金が曲がる。

b. 子供が針金を曲げる。

(4) a. 木が倒れる。

b. 子供が木を倒す。

自動詞と他動詞との間に形態的・意義的・統語的な対応が成り立つ場合にのみ自他対応が成り立つとみなすことにより、次のような対応は本稿では自他対応とみなさないことになる。第一は、自動詞「死ぬ」と他動詞「殺す」の対、自動詞「できる」と他動詞「作る」の対である。

(5) a. 人質が死ぬ。

b. 犯人が人質を殺す。

(6) a. 夕食ができる。

b. 妻が夕食を作る。

(5),(6)に示される如く、これらの対は、意義的・統語的には対応関係が成り立つといえようが、形態的な対応を欠いている。従って、「死ぬ」、「できる」は対応する他動詞のない自動詞であり、「殺す」、「作る」は対応する自動詞のない他動詞である。

第二は、自動詞「受かる」と他動詞「受ける」などの対応である。これらは、「助かる」と「助ける」、「もうかる」と「もうける」などと同様の形態的対応、すなわち自動詞の語末が /-aru/ で他動詞の語末が /-eru/ であるという対応を示すものではある。しかし次の(7),(8)に示される如く、統語的な対応関係が(少なくとも現代語においては)成り立たない。従って、「受かる」は対応する他動詞のない自動詞であり、「受ける」は対応する自動詞のない他動詞である。

(7) a. * 試験が受かる。

b. 学生が試験を受ける。

(8) a. * ボールが受かる。

b. 子供がボールを受ける。(注 4)

以上のような立場から、本稿では以下、「無対自動詞」、「有対自動詞」、「有

対他動詞」、「無対他動詞」という語を用いることにする。各々次のような意味である。

「無対自動詞」：対応する他動詞のない自動詞（「ある、そびえる」など）

「有対自動詞」：対応する他動詞のある自動詞（「倒れる、曲がる」など）

「有対他動詞」：対応する自動詞のある他動詞（「倒す、曲げる」など）

「無対他動詞」：対応する自動詞のない他動詞（「置く、読む」など）

1. 3 従来の研究

有対自動詞の特徴に関しては西尾（1978:174）に、「対立する他動詞をもつ自動詞の一般的性格」としていくつかの点があげられている。詳しい考察がなされたものとはいえないかとも思われるが、有対自動詞の特徴に一般的・概括的にふれたものは、管見ではこれだけなので、いくぶん長くなるが引用する（注 5）。

「自動詞の中で、対立する他動詞をもつものにおいては、動詞の表す属性の主体において、ある状態の変化が成立するというタイプの意味を表すものが多い。・・・これはインド・ヨーロッパ語で古く盛んだった中相態（middle voice）のような言い方をする動詞として『中相動詞』というべきものだとも言われる。これらの動詞は大体、直接の受身も迷惑の受身も構成しないので、三上章氏の分類によれば『所動詞』に属する性格を主とするものだと言えよう。『～ている』の形は『動きの終わったあとに動きの結果として動きの主体の変化した状態が続いている』ことを表すので、『結果動詞』すなわち主体に変化を生ずる動詞に所属するものである。動きが継続中であることを表す『～ている』の形にはならないものが多いので、『瞬間動詞』が多い。また、これらの動詞は意志的な動作を表すものではなく、命令形や意志形（「～（よ）う」の形）を本来の意味で用いることはできないので、基本的には『無意志動詞』に分類される性質をもっている。」

後の考察でも明らかになるように、西尾の指摘は確かに有対自動詞のいくつかの側面を正しくとらえている。しかしそれではなぜ、有対自動詞が「中相動詞」（注 6）や「所動詞」（注 7）の特徴を有し、また「結果動詞」（注 8）や「瞬間動詞」（注 9）さらには「無意志動詞」とであるという性質を呈するのだろうか。

有対自動詞に西尾で指摘されているような特徴がみられるとすれば、何か有対自動詞に本質的な特徴いわば核になるような特徴があって、その特徴が様々な現れ方をするのだと考えられる。本稿では、有対自動詞の本質的な特徴は次の二点にあることを明らかにしたいと思う。一点は、有対自動詞の主語は非情物であること、もう一点は、有対自動詞は、働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を表すものであることである。さらに、考察の過程で西尾の言説にふれ、先の西尾で指摘されている有対自動詞の様々なふるまいはこの二つの特徴に起因するものであることも明らかにしたいと思う。

2 有対自動詞と無対自動詞の意味的分布

本章では、自動詞を主として意味的な特徴によって分類し、有対自動詞と無対自動詞に分けて例示する。それによって、有対自動詞と無対自動詞の意味的な分布を概略示することができよう。ただし、自動詞を分類すること自体は本稿の目的ではない。したがって、「自動詞の分類」としてこれを提案しようとするものではなく、あくまで便宜的な分類である。それ故、動詞の多義性の問題も一応措くことにし、一つの動詞はその基本的と思われる意味によって一つの類にのみ分属させる。なお分類に際しては、国立国語研究所編（1964、以下『分類語彙表』と呼ぶ）、大野・浜西編（1981）、奥田（1983）、成田（1983）、仁田（1983,1986）等を参考にした。

まず第一の類として、物や人の静的な状態や性質を表す自動詞がある。時間の観念を含まず動きや変化を表すものではないから、「何時に～」、「何時間～」などといった表現がきわめて不自然なものが多い。こうした種類の自動詞はほとんどが無対自動詞である（注10）。

《無対自動詞》

- (9) ある、居る、ありふれる、優れる、優る、秀でる、劣る、だぶつく、異なる、似る、似合う、偏る、沿う、（山が海岸に）迫る、臨む、そびえる、基づく、因る、次ぐ、（テニスが）できる、要る、障る、みなぎる、冴える、くすむ、かさむ、ざらつく、透く、など。

《有対自動詞》

- (10) 見える、聞こえる、知れる、など。

『分類語彙表』では、これらの動詞のうち「ある、居る、ありふれる」が[2.120

存在]に、「優れる、秀でる、劣る」が[2.19 過不足・優劣]に、「異なる、似る」が[2.112 異同]に、「偏る、沿う」が[2.17 位置・方向]に、「基づく、因る」が[2.111 関係]に分類されている。なお、有対自動詞の例として(10)にあげた「見える」、「聞こえる」、「知れる」は、各々他動詞「見る」、「聞く」、「知る」に対応すると一応は考えられる。しかしこれらの自動詞は、他動詞の表す働きかけとは無関係に物の状態を表すことが多いので、典型的な有対自動詞とみなすには多少疑問が残る。

第二に、人の動作・行為・表情などを表す自動詞がある。これらも無対自動詞がほとんどである。なお、[]内にあげた動詞については後に3. 1でふれる。

《無対自動詞》

- (11) 歩く、歩む、走る、泳ぐ、^{ノド}駆ける、^{ウツ}滑る、跳ねる、すわる、転ぶ、
行く、来る、通う、上る、下る、登る、越す、越える、去る、でかける、
参る、うなずく、答える、騒ぐ、どなる、いばる、黙る、泣く、
笑う、ほほえむ、眠る、寝る、遊ぶ、休む、群がる、逃げる、
働く、勤める、嫁ぐ、戦う、急ぐ、住む、暮らす、勝つ、敗れる、
触る、触れる、会う、遭う、出会う、別れる、そむく、報いる、
畏まる、従う、へつらう、こびる、おもねる、

[集まる、入る、出る、進む、上がる、降りる、戻る]など。

《有対自動詞》

- (12) 驚く、助かる、など。

これらの動詞は『分類語彙表』ではさまざまな類に分類されているが、ここでは、人の動作・行為・表情を表す動詞という点でまとめた。

第三に、人の感情・精神的な状態などを表す自動詞がある。これらもほとんどが無対自動詞である。

《無対自動詞》

- (13) 飽きる、呆れる、憧れる、焦る、怒る、慌てる、こだわる、めいる、
惚れる、ふける、がんばる、耐える、勤める、親しむ、頼る、
甘える、すねる、いじける、ひがむ、任せる、迷う、ときめく、など。

《有対自動詞》

- (14) 苦しむ、など。

『分類語彙表』では、[2.301 気分・情緒]、[2.302 対人感情]、[2.3041 努力・忍耐]などに分類されているものが多い。

第四に、天候・気象・時間の経過などを表す自動詞がある。これらは、主語である特定の物の動き・状態・変化を表すというよりは、それを取りまく状況全体の動き・状態・変化を表すというべきものである。たとえば、「雨が降る」が表しているのは、「雨」というものがあってそれが「降る」という状態にあるということではない。空から水滴が落ちてくるその状況全体が「雨が降る」なのである。こういった種類の自動詞も無対自動詞がほとんどである。

《無対自動詞》

- (15) 晴れる、曇る、降る、(風が)吹く、(雪が)積もる、ふぶく、
しける、(夜が)明ける、(日が)暮れる、(夜が)更ける、
(時間が)過ぎる、(時間が)経つ、(月が)光る、
(星が)輝く、映える、など。

《有対自動詞》

- (16) (基礎的な語には該当するものなし)

『分類語彙表』では、[2.5 自然現象]に分類されているものが多く、他に「明ける、暮れる、更ける、過ぎる、経つ」は[2.16 時間・時刻]に分類されている。

第五に、人や動植物の自然な生育に関する事象や、人や動植物の状態に生じる自然な変化などを表す動詞がある。これらもほとんどが無対自動詞である。

《無対自動詞》

- (17) 死ぬ、病む、疲れる、くたびれる、しびれる、太る、やせる、
やつれる、かぶれる、膿む、酔う、植える、咲く、茂る、実る、
枯れる、衰える、しばむ、萎びる、など。

《有対自動詞》

- (18) 育つ、覚める、癒える、など。

『分類語彙表』では、[2.581 生・生育]、[2.582 死]、[2.300 感覚・疲労・睡眠]などに分類されているものが多い。

以上に示した第一から第五までの類の動詞には概して無対自動詞が多いのに対し、以下に示す第六から第十までの類の動詞には有対自動詞が多いことに注意されたい。

第六に、物の属性や物理的特性の一つ、たとえば形・大きさ・長さ・温度・湿度

・品質・数量・強度・向きなどが変化する事象を表す自動詞がある。これらの動詞には、無対自動詞が少なく有対自動詞が多い。

《無対自動詞》

(19) 腐る、錆びる、濁る、腫れる、など。

《有対自動詞》

(20) 曲がる、壊れる、折れる、切れる、崩れる、砕ける、潰れる、破れる、割れる、裂ける、ちぎれる、縮まる、縮む、伸びる、広がる、固まる、煮える、焼ける、燃える、焦げる、沸く、冷める、冷える、暖まる、薄まる、荒れる、乱れる、ふさがる、整う、まとまる、かたづく、ちらかる、強まる、弱まる、高まる、乾く、濡れる、汚れる、染まる、直る、治る、締まる、緩む、溜る、儲かる、増える、増す、減る、残る、余る、開く、閉まる、傾く、倒れる、回る、揺れる、など。

この類の自動詞には、『分類語彙表』で[2.150]～[2.158]の[変化]に分類されているものが多い。その他には、「ちらかる、乱れる」が[2.130 整序]に、「染まる、汚れる」が[2.502 色]に、「乾く、濡れる」が[2.513 乾湿]に、「焦げる、煮える、燃える、焼ける」が[2.516 火]に、「冷める、冷える、沸く、暖まる」が[2.517 熱]に分類されているなどの例がある。しかしこれらも物の物理的な状態の変化を表すものといっていよう。

第七に、物の移動すなわち物の存在場所が変化する事象を表す自動詞がある。これらはほとんどが有対自動詞である。

《無対自動詞》

(21) したたる、など。

《有対自動詞》

(22) 上がる、流れる、移る、落ちる、降りる、転がる、下がる、沈む、動く、進む、戻る、寄る、など。

『分類語彙表』ではこれらの動詞のほとんどが[2.15 変化]に分類されている。

第八に、ある物に付着していた物がそこから取り除かれたり、ある場所に存在していたものがそこに存在しなくなったりする事象を表す自動詞がある。これらの動詞もほとんどが有対自動詞である。

《無対自動詞》

(23) (基礎的な語には該当するものなし)

《有対自動詞》

(24) はずれる、はがれる、はげる、離れる、ほどける、もげる、取れる、
抜ける、など。

『分類語彙表』では、第六類、第七類と同じく[2.15 変化]に属するものがほとんどである。

第九に、物がある場所に存在あるいは接触するようになる事象を表す自動詞があり、これらもほとんどが有対自動詞である。

《無対自動詞》

(25) こもる、など。

《有対自動詞》

(26) 納まる、付く、埋まる、詰まる、掛かる、重なる、はさまる、並ぶ、
かぶさる、備わる、はまる、浮かぶ、浸る、返る、入る、出る、
加わる、混ざる、満ちる、刺さる、揃う、当たる、伝わる、届く、
つながる、詰まる、など。

この類の動詞にも、『分類語彙表』で[2.15 変化]に分類されているものが多いが、その他には、「かぶさる、混ざる」が[2.113 包摂]に、「揃う、備わる」が[2.130 整備]に分類されているなどの例がある。

最後に第十として、抽象的な事柄や事態そのものの変化を表す自動詞がある。これらの動詞にも無対自動詞は少なく有対自動詞が多い。なお、この類の動詞は、それを取り巻く状況全体の動き・状態・変化を表しているという点では、先に第四類とした「晴れる」、「曇る」、「降る」などの動詞と共通する点がある。両者の相違は、第四類の動詞が表しているのは自然現象といえる事象であるのに対し、この類の動詞が表しているのはその成立に関わっている「人」の存在が感じられる事象であるという点である。

《無対自動詞》

(27) こじれる、さびれる、栄える、はかどる、など。

《有対自動詞》

(28) 始まる、終わる、変わる、決まる、定まる、改まる、延びる、済む、
止まる、続く、起こる、起きる、消える、滅ぶ、絶える、静まる、

早まる、など。

これらのことから、有対自動詞と無対自動詞はその意味的な分布領域をかなり異にしていることが明らかにできたと思われる。以上をまとめると次のようになる。

〔1〕動きや変化を伴わない静的な状態を表す動詞には無対自動詞が多い。

（第一の類の動詞など）

〔2〕人の動作・行為・表情・感情などを表す動詞には無対自動詞が多い。

（第二、第三の類の動詞など）

〔3〕広い意味の自然現象を表す動詞には無対自動詞が多い。

（第四、第五の類の動詞など）

〔4〕物の物理的状態の変化、存在場所の変化、二者間の位置関係の変化などを表す動詞には有対自動詞が多い。

（第六、第七、第八、第九の類の動詞など）

〔5〕（人の活動によって成立する）事象そのものの変化を表す動詞には有対自動詞が多い。（第十の類の動詞など）

3 有対自動詞の主語の特徴とその現れ

本章では有対自動詞の主語の特徴をみる。まず3. 1で、有対自動詞の主語は主として非情物であることを明らかにし、次に3. 2で、その特徴が現れているいくつかの現象を検討する。

3. 1 有対自動詞の主語の特徴

第2章で明らかになった自動詞の分布からも推測できるように、有対自動詞は非情物を主語とすることが多く、有情物を主語とすることは稀である。

(29) 針金が曲がる。

(30) 風船が上がる。

(31) セーターのボタンがはずれる。

(32) 押し入れに荷物が納まる。

(33) 仕事が始まる。

ただし、この特徴に一見矛盾する現象がいくつかある。第一に、次の(34)～(37)では「増える」、「倒れる」、「並ぶ」、「育つ」の主語が人である。しかし

この場合の人は、数としての人あるいは意志の感じられない物体のようにみなした場合の人であり、有情物としての人とはいいがたい。

(34) 委員会で担当警官を増やすことが決定された。警官は 30 人に増えた。

(35) 自分は怒って妻を突飛ばした。妻は寝床の上へ倒れた。

(志賀直哉『和解』)

(36) 学生が校庭に並んでいる。

(37) 子供が丈夫に育つ。

第二に、「驚く」、「助かる」などは主として人が主語になる有対自動詞である。

(38) その子は大きなぬいぐるみを見て驚いた。

(39) 人工呼吸のおかげで溺れた青年が助かった。

しかし、(38)の「驚く」や(39)の「助かる」が表しているのは、「その子」や「青年」が自ら動作主となって行う行為というよりは他者からの働きかけによってひきおこされる状態である。従って「驚く」、「助かる」などの主語も典型的な有情物とは異なっているというべきであろう(注11)。

第三に、第2章の(11)で有対自動詞の例として[]内に挙げた動詞「集まる、入る、出る、進む、上がる、降りる、戻る」などのように、主語となっているものの移動を表す自動詞についてである。これらの自動詞では非情物だけではなく有情物としての人も主語になりうる。

(40) みんなも大統領官邸がどうなったのか見ようと集まってきているようだった。(近藤絃一『サイゴンのいちばん長い日』)

(41) そこは繭倉の横の畑地で、島村達と一緒に駆けつけた村人は大方そこにはいったのだった。(川端康成『雪国』)

しかし(40)の「集まる」、(41)の「はいる」は、1. 2で述べた自他対応の基準を考慮にいれるならば有対自動詞とはいいがたい。なぜなら、(40)、(41)は次の(40)'、(41)'のような他動詞文と意義的・統語的な対応をなしているとは考えにくいからである。

(40)' みんなを(大統領官邸の前に)集める。

(41)' 村人をそこにいれる。

すなわち、(40)の「みんなが集まる」、(41)の「村人がはいる」という事象は、その事象をひきおこす(40)', (41)'のような事象(そして、その行為の存在)を

全く前提とすることなく生じる事象だということである。

ところが一方で、「集まる」、「入る」には、形態的・意義的・統語的に「集める」、「入れる」と対応している場合がもちろんある。

(42) 五年間集めているのでもうたくさん記念切手が集まった。

(43) 強力なポンプで入れたので数分でタンクいっぱいに水が入った。

(42) では、「(誰かが) 切手を集める」という行為の結果として「切手が集まる」という事象が生じたのであり、(43) でもやはり、「(誰かが) 水を入れる」という行為が「水が入る」という事象を生ぜしめたのである。こういった場合の「集まる」や「入る」のようないわば典型的な有対自動詞の場合には、その主語はやはり非情物だといえる。

以上のことから、「集まる、入る、出る、進む、上がる、降りる、戻る」などの自動詞には次のような a., b. 2 種類の使い方があることがわかる。

《自動詞表現》

《他動詞表現》

(44) a. 切手が集まる。 — 子どもが切手を集める。

b. 人々が集まる。 — ×

(45) a. タンクに水が入る。 — 係員がタンクに水を入れる。

b. 村人がそこに入る。 — ×

(44), (45) いずれも、a. のような自動詞すなわち非情物を主語とする自動詞が典型的な有対自動詞であり、b. のような自動詞すなわち有情物を主語としてその移動などを表す自動詞は無対自動詞とみなすべきものである。

以上述べてきたことから、有対自動詞は典型的には非情物を主語とする自動詞であることが明らかにできたかと思う。主語が非情物であるという特徴は、次に 3. 2 でみるような有対自動詞のいくつかの統語的な特徴となって現れる。

3. 2 主語の特徴の現れ

3. 2. 1 意志・主体性に関わる表現

有対自動詞は、いわゆる意向形、勧誘形、命令形をとるときわめて不自然である。(以下、例文の文頭の*は、きわめて特殊な文脈で以外はその文が文法的あるいは意味的に正しくない、あるいは著しく不自然であることを示す。)

(46) *さあ、始まろう。

(47) *燃けましよう。

(48) *決まりなさい。

さらに、動詞の連用形にいわゆる希望の助動詞「たい」の後接した「～たい」形、補助動詞「おく」、「みる」の後接した「～ておく」形、「～てみる」形などもやはり非常に不自然である。

(49) *始まりたい。

(50) *燃けておく。

(51) *決ってみる。

(46)～(51)が不自然なのは、意向形、勧誘形、命令形、「～たい」形、「～ておく」形、「～てみる」形などがいずれも、主語たる名詞に意志や主体性を必要とする表現であるため、非情物を主語とする有対自動詞にふさわしくないからである。西尾(1978:174)で、有対自動詞が「無意志動詞」とされていた所以である。

ちなみに、『宇宙からの帰還』(立花隆)〔中公新書: 375ページ中 65 ページ分〕、『虫歯はどうしてできるか』(浜田茂幸)〔岩波新書: 193 ページ中 96 ページ分〕、『わたしの少女時代』(黒沼ユリ子ほか)〔岩波ジュニア新書: 209 ページ中 80 ページ分〕の文中には有対自動詞の例が 356例あるが、(46)～(51)に示した意向形、勧誘形などの例は一例もない。

また、助動詞「べし」は、ある種の動詞に後接した場合、次の(52)のように、ある行為を行うことが主語にとっての義務であることを表すことができる。しかし、(53)、(54)のように有対自動詞に後接した「べし」はこういった意味を表しえない。

(52) 学生は本を読むべきだ。

(53) 地下にどれだけ水が浸みていけば、崩れるべき条件になるということは、科学の知識で考え得ることである……。しかしこれは崩れるべき条件になることがいえるだけで、稀れには崩れないこともある。

(中谷宇吉郎『科学の方法』)

(54) この式も前の国際オームの式も、最後の桁は少しあやしく、また今後実験がさらに精密になれば、少しかわるべき性質の式である。

(中谷宇吉郎『科学の方法』)

(53)、(54)の「べし」が表しているのは、「～である蓋然性が高い／～という変

化が生じるのが当然だ」というほどの意味であり、(52)のそれとは異なっている。
この事実もまた、有対自動詞の主語が非情物であることから生じる現象である。

3. 2. 2 使役形

有対自動詞はまた、使役形もとりにくい。次の使役表現 (55) ～ (57) はいかにも不自然である。

(55) *糸を(に) 切れさせた。

(56) *木を(に) 折れさせた。

(57) *仕事を(に) 始まらせた。

このことは、青木(1980:456)の指摘するように「使役文における使役の対者(=動作者)には動作の実現者としての主体性が残されている故に、自動詞の使役態は主体性を持ち得る有情物、あるいは動作実現の能力のあるものを対者とする表現に用いられ」るためだと考えられる。

ちなみに、3. 2. 1でふれた『宇宙からの帰還』など3点の文中には、非情物を主語とする有対自動詞の使役形の例は一例もない。

しかしながら、有対自動詞の使役形が用いられる次のような例があることは看過しがたい。

(58) 下味をした肉類の表面を固まらせ、うまみを外ににがさないように・・・
・(『きょうの料理』1981年3月号)

(59) ものをこわしたり、石をころげさせたり、物体の位置を変えたりさせる力・・・(中谷宇吉郎『科学の方法』)

(58)、(59)で有対自動詞の使役形が用いられていることに関しては青木(1977)の所説が参考になる。青木(同:31)によれば、「非情物を対象としても、対象物の能力・本性を有情物の意志と同様に見なすならば『ゼリーを冷蔵庫にいれてかたまらせる』の表現が成り立ち、そのものの本性を利用してそれを助成する意となる」という。(58)の「固まらせ」は青木のあげている「かたまらせる」と同様に解釈できる。また(59)の「ころげさせる」も、石を、自ら「ころげる」能力・本性を具えたものとみなしているのだろう。

ところで、藤井(1971)の考察は、有対自動詞が使役形をとりにくいという本稿の観察と一見矛盾するかのようである。なぜなら藤井(同)は、「広がる」と「広

げる」、「くずれる」と「くずす」のような「対立する動詞の組」（藤井 1971:15）を 11 対とりあげて、自動詞の使役形（「広がらせる」、「くずれさせる」など）と他動詞（「広げる」、「くずす」など）との意味の異同を観察したものであり、「他動詞と対立する自動詞」の使役形の例がいくつか示されているからである。しかし、それらの例文を検討すると、本稿でいう有対自動詞についてはやはり使役形が用いられにくいことが明らかになる。なぜなら、藤井が「他動詞と対立する自動詞」の使役形と扱っているもののほとんどは、統語的対応を考慮に入れるならば無対自動詞とみなすべき自動詞の使役形だからである。一、二例をあげると、たとえば、自動詞「そう」と他動詞「そえる」に対応がなりたつとして「スーツを腰にそわせる」を「他動詞と対立する自動詞」の使役形だとしている例がある。しかし、自動詞文「スーツが腰にそう」に対応する他動詞文として「*スーツを腰にそえる」を考えることはできない。また、自動詞「落ちつく」と他動詞「落ちつける」に対応がなりたつとして「人口を九百五十万人に落ちつかせる」を「他動詞と対立する自動詞」の使役形だとしている例があるが、これも、自動詞文「人口が九百五十万人に落ちつく」に対応する他動詞文として「*人口を九百五十万人に落ちつける」を考えることはできない。したがって、「スーツを腰にそわせる」における「そわせる」や「人口を九百五十万人に落ちつかせる」における「落ちつかせる」は、有対自動詞の使役形とはいえないのである（注12）。

以上の検討から、本稿でいう有対自動詞はやはり使役形としては用いられにくいといってよいだろう。

3. 2. 3 受身形

あらためて述べるまでもないが、日本語では自動詞も受身形をとっていわゆる間接受身（迷惑受身）をつくり、多くは主語がなんらかの被害・迷惑を被ることが表される。

(60) 夫に死なれて苦勞した。

(61) 夜中に赤ん坊に泣かれて眠れなかった。

(62) 旅先で雨に降られてさんざんな目にあった。

しかし、有対自動詞は間接受身としても受身形になりにくいのである。次の (63) ～ (65) のような例が想定できなくはないが何か不自然な感じが伴う。

(63) ? (琴の) 演奏中に糸に切れられて困った。

(64) ? 地震で窓ガラスに割れられてたいへんだった。

(65) ? ワープロにこわれられて不便だった。

ちなみに、3. 2. 1 でふれた『宇宙からの帰還』など3点の文中には自動詞の受身形が2例あるが、いずれも無対自動詞の例（「笑われる」と「泣かれる」）であり、有対自動詞の受身形は一例もない。

しかしながら、次の例のようにある種の文脈の中では有対自動詞の受身形が用いられることがある。

(66) こう云う時自分はジリジリする程意地悪くなる。自分で自分を制しきれなくなる。しかし一方妻の乳が止まられると厄介だという気があった。

（志賀直哉『和解』）

「止まる」はたしかに「止める」と対応する有対自動詞である。しかし、自動詞文「妻の乳が止まる」に対応する他動詞文「妻の乳を止める」はこの状況では意味的にそぐわない表現である。従って、この場合の「止まられる」は、「乳が止まる」の「止まる」を無対自動詞に近いとみなし、その使役形が用いられたとみるべきものである。

このように有対自動詞が間接受身としても用いられないという特徴もまた、主語が非情物であることの現れである。なぜなら、間接受身になりうるのは（対応する他動詞の有無に関わりなく）自動詞の主語が有情物である場合がほとんどだからである。間接受身の例として、(60)「夫に死なれる」、(61)「子供に泣かれる」などのほかに、(62)「雨に降られる」の例があげられることが多いが、「(雨が)降る」のような非情物主語の自動詞が間接受身になるのはきわめて稀であり、「雨に降られる」はむしろ例外的なのである（注13）。また、たとえば「倒れる」についても、(67)のように「倒れる」主体が人である場合は「倒れられる」が自然な表現であるが、(68)のように「倒れる」主体が物である場合は多少とも不自然な感じが否めない。

(67) 大事な時期に父に倒れられて困った。

(68) ? 台風で庭の木に倒れられて困った。

したがって、1. 3 で示した西尾（1978）で、「（有対自動詞は）『所動詞』に属する性格を主とする」とされていたのも、有対自動詞の主語が非情物であること

の一つの現れだといえる。

4 有対自動詞の表す事象の特徴とその意味的・統語的な現れ

前章では有対自動詞の主語の特徴をみたが、本章では、有対自動詞の表す事象の特徴をみる。4. 1では、まず有対自動詞の表す事象の要因を考察し、その事象がいずれも人の働きかけによって生じさせうる変化であることを示す。4. 2では、有対自動詞のそういった特徴が反映されている二つの現象を検討する。

4. 1 有対自動詞の表す事象の特徴

第2章で明らかになったように、有対自動詞には非情物の状態の変化を表すものが多い。本節ではそういった非情物の変化を、それが何によって引き起こされるかすなわち変化を生じさせる要因は何かという観点から二つの場合に分けて眺めることにする。二つの場合とは、外因的な変化である場合と内発的な変化である場合である。

4. 1. 1 外因的な変化

外因的な変化とは、外力によって非情物に生じる変化であり、これは大きく二つに分けられる。一つは有情物の働きかけによって生じる変化であり、もう一つは自然力の影響で生じる変化である。

4. 1. 1. 1 有情物の働きかけによる変化

有対自動詞は、有情物の働きかけによって生じる非情物の変化を述べることがある。たとえば次の(69)では「切る」という働きかけによって「切れる」という変化が生じることが表されている。

(69) 島村は女の髪をかき分けて元結を切った。ひとところが切れるたびに、
駒子は髪を振り落としながら少し落ちついて、・・・

(川端康成『雪国』)

次の(70)、(71)でも、「とかす」、「静める」という働きかけによって各々「とける」、「静まる」という変化が生じることが表されている。

(70) 金属の皿を熱して、その上で少量のマツヤニをとかす。よくとけたら熱するのをやめて、皿をさます。(坪井忠二『新・地震の話』)

(71) 自分は畳廊下を往ったり来たりして心を静めようとした。・・・二分間程で自分の気持は静まった。(志賀直哉『和解』)

(69)～(71)において、他動詞による表現と自動詞による表現とが表しているのは次のような状況である。

《他動詞表現》

《自動詞表現》

(69)' 島村が女の髪の元結を切る。 — 元結のひとところが切れる。

(70)' (実験者が) マツヤニをとかす。 — マツヤニがとける。

(71)' 自分が心を静める。 — 心が静まる。

これら(69)～(71)は、他動詞によって働きかけが明示的に表現されている場合である。しかしまた次の例のように、有情物の働きかけによって生じた変化であることが明白であっても、その働きかけが明示的には表現されていない場合も多い。

(72) 十一時過ぎ、家々の窓の明かりはほとんど消えた。

(近藤紘一『サイゴンのいちばん長い日』)

(73) 消防組青年団の延べ人員二千名の出動の手配がもう整っていた。

(川端康成『雪国』)

(74) 大帝の崩御の日を限りに年号が改まり・・・

(宮尾登美子『鬼龍院花子の生涯』)

これらで表されている状況は次のようなものであると考えられる。

《他動詞表現》

《自動詞表現》

(72)' (誰かが明かりを消す。) — 明かりが消える。

(73)' (誰かが手配を整える。) — 手配が整う。

(74)' (誰かが年号を改める。) — 年号が改まる。

以上みてきた(69)～(74)の有対自動詞が表しているのは、(明示的に表現されているか否かにかかわらず)働きかけによってひきおこされる変化である。この場合、変化の生じる非情物は働きかけの受け手という意味において被動者とみなすことができる。したがって、有対他動詞は動作主の働きかけを表現し、有対自動詞は被動者の変化を表現しているといえる。

4. 1. 1. 2 自然力の影響による変化

有対自動詞は、自然力の影響によって生じる非情物の変化を表す場合もある。

(75) 台風で木が倒れ、電線が切れる。

(76) 火山の爆発で溶岩が流れる。

(77) 濁流のため堤防に亀裂が入る。

これらは、変化の原因となった外力として「台風」、「火山の爆発」、「濁流」などの自然力が存在する場合であり、意味的には次のような状況であると考えられる。

《他動詞表現》

《自動詞表現》

(75)' (台風が木を倒し、電線を切る。) — 木が倒れ、電線が切れる。

(76)' (火山の爆発が溶岩を流す。) — 溶岩が流れる。

(77)' (濁流が堤防に亀裂を入れる。) — 堤防に亀裂が入る。

ただし、前節で述べた有情物の働きかけによって生じる変化の場合と異なり (75)' ~ (77)' の他動詞文すなわち自然力を主語にした他動詞文は日本語にはあまりなじまない表現である (注14)。そのため、「台風」や「火山の爆発」を文中に表現するとすれば先の (75)~(77) のように、「で」格や「~のために」の形で表すことになるわけである。このことは、「台風が木を倒す」の「台風」は、「木」に変化を生じさせる外力ではあるものの、「きこりが木を倒す」の「きこり」が動作主であるのと同等にはみなしがたいことをうかがわせるものである。一方、変化の生じる「木」や「電線」などは、外力の受け手という意味においてやはり被動者とみなすことができる。したがってこの場合もまた、有対自動詞は被動者の変化を表現しているといえる。

4. 1. 2 内発的な変化

有対自動詞はまた、外力によって生じるのではない非情物の変化を表すこともある。次のような場合である。

(78) 長く着ているうちにセーターの袖口が伸びる。

(79) 久しぶりに下駄を履こうとしたら鼻緒が切れていた。

(80) 兵たちの状態は見違えるように悪くなっていた。服は裂け、靴は破れ、髪と髭が伸びて、汚れた青い顔の中で、目ばかり光っていた。

(大岡昇平『野火』)

これらで表されているのは、あたかも非情物自体にその変化が生じる本性あるいは力が備わっていておのずから生じたかのようないわば内発的な変化である。換言すれば、変化を生じさせる動作主のような力が非情物に備わっていて、非情物が自

らに働きかけて生じさせた変化ともいえよう。したがって (78)～(80) には対応する他動詞表現が考えにくく、その意味においては典型的な有対自動詞とは趣を異にする。

《他動詞表現》

《自動詞表現》

(78)' (? セーターの袖口を伸ばす。) — セーターの袖口が伸びる。

(79)' (? 鼻緒を切る。) — 鼻緒が切れる。

(80)' (? 服を裂き、靴を破り、髪と髭を伸ばし、・・・)

— 服は裂け、靴は破れ、髪と髭は伸びて、・・・

こういったことから、(78)～(80)の主語である「セーターの袖口」や「鼻緒」などを、前節でみた有対自動詞の主語と同様に被動者とみなすことは適当でないといわねばならない。(78)～(80)のような有対自動詞は、それ自身が動作主でもあるかのような被動者に生じる変化を表現しているといえよう。

なお、1. 3 でふれた西尾 (1978) に、「(有対自動詞は)『中相動詞』というべきものだとも言われる。」とあるのは、ある種の有対自動詞のもつこのような性質をさしているのだと思われる。

4. 1. 3 働きかけによって生じさせうる変化であること

再三述べてきたように、有対自動詞には非情物に生じる変化を表す動詞が多い。しかしながら、非情物に生じる変化を表す自動詞がすべて有対自動詞だというわけではない。たとえば、「晴れる、曇る、(風が)吹く、(夜が)明ける、(夜が)更ける、(日が)暮れる、(時間が)経つ」をはじめ、非情物に生じる変化を述べる自動詞であっても無対自動詞であるものは少なくない。

では、有対自動詞が表す非情物の変化と、無対自動詞が表す非情物の変化との違いは何だろうか。第2章で (15) として挙げた動詞の例からもうかがえるように、無対自動詞の表す非情物の変化たとえば「夜が更ける」、「時間が経つ」などの変化は、人の力でひきおこすことのできない変化である。それに対し有対自動詞が表す変化は、(「下駄の鼻緒が切れる。」)のような内発的な変化である場合もあるにせよ) 人の働きかけによって生じさせうる変化である。すなわち、非情物に生じる変化が働きかけによって生じさせうる変化である場合に限って、働きかけを述べるものとしての他動詞と、生じる変化を述べるものとしての自動詞とが自他対応をな

しているのである。

4. 2 有対自動詞の意味的な特徴の現れ

本節では、非情物に生じる変化を表すものとしての有対自動詞の特徴が現れている2つの現象を示す。「～ている」形の表す意味と、いわゆる連用形名詞の表す意味である。

4. 2. 1 「～ている」形の意味

動詞の「～ている」形の表す意味をいくつかに分ける場合しばしばその一つとして、「結果の残存」を表すものがあるとされる（金田一 1954、高橋 1976 など）。これを自他対応の観点からみると、有対自動詞の「～ている」形には「結果の残存」を表すものが多いといえる。

(81) 包装紙が破れている。

(82) 荷物が網欄に上がっている。

(83) 床の間に掛け軸が掛かっている。

(84) 会議が始まっている。

(81)～(84)の「～ている」形は各々、「包装紙を破る」、「荷物を網欄に上げる」、「床の間に掛軸を掛ける」、「会議を始める」という働きかけの結果として、「破れる」、「上がる」、「掛かる」、「始まる」という状態が生じ、それが非情物に「残存」していることを表している。

ただし若干例外もある。たとえば次の例は、有対自動詞の「～ている」形であるが「結果の残存」を表すとはいいがたい。

(85) 木の枝が揺れている。

(86) こまが回っている。

(85)、(86)の「～ている」形では、いわゆる「動きの継続」が表されている。これについては次のように考えられる。(85)の「揺れる」、(86)の「回る」は、各々に対応する他動詞「揺らす」、「回す」が、非情物に変化をひきおこしはするが最終的にはそのものに結果を残すことのない働きかけを表すものである。他動詞「揺らす」、「回す」のもつそういった特殊性が、各々に対応する自動詞の「～ている」形にも現れているのである。

また、有対自動詞であっても共起する副詞句の影響などにより、「～ている」形が「結果の残存」を表すとはいいがたい場合がある。

(87) 姿が写る部分だけは窓の外が見えないけれども、娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、・・・（川端康成『雪国』）

(88) 木の葉がさらさら流れている。

以上、(85)～(88)のような場合があるものの、有対自動詞の「～ている」形は典型的には「結果の残存」を表すといえよう。

このように有対自動詞の「～ている」形が「結果の残存」を表すことが多いのは、有対自動詞が行為や動作を表すものではなく非情物に生じる変化を表す自動詞だからである。このことは、無対自動詞であっても非情物に生じる変化を表す動詞はその「～ている」形が「結果の残存」を表しうることからもうかがえる。

(89) 花が咲いている。

(90) 魚が腐っている。

(91) 水が濁っている。

ところで、西尾（1978）との関係であるが、有対自動詞の「～ている」形は「その動作・作用が終わってその結果が残存している」（金田一 1954:8）ことを表すので、「（有対自動詞には）『瞬間動詞』が多い」という西尾（1978）の指摘は妥当である。ただし、西尾のように、「～ている」形の表す意味の特徴を根拠として「（有対自動詞は）『結果動詞』すなわち主体に変化を生ずる動詞に所属するものである」と特徴づけるのにはいくぶん注意が必要である。なぜなら第一に、藤井（1966）のいう「結果動詞」とは、「あとにある結果をもたらすような動作・作用を表す動詞」であり、「結婚する、（花が）散る、行く、来る、乗る、出発する、到着する、しゃがむ、立つ、すわる、知る、着る」などが例としてあげられていることからわかるように、その概念は非常に広いものだからである。第二に、上に示した藤井の定義をみるならば、「結果動詞」であるか否かは本質的には「～ている」形の意味とは無関係である。したがって有対自動詞が結果動詞に属するとするのには西尾が基づいている根拠は必ずしも適切とはいいがたいのである。

なお最後に、ある種の有対自動詞の「～ている」形は次のように結果の残存とも動作の継続ともいえない状態を表す場合があることをつけ加えておく。

(92) 日本列島は南北に細長く伸びている。

(93) 図11で熱流の少ないところは、図2で震央の多いところとだいたい同じ

場所に重なっているようである。(坪井忠二『新・地震の話』)

これらは単に非情物の静的な状態を述べるものであり、そういった状態を呈する以前の何らかの動きを前提とするものではない。この点でこういった場合の有対自動詞は金田一(1954)のいわゆる「第四種の動詞」(「そびえる、とがる」など)の性質を帯びているといえよう。

4. 2. 2 連用形名詞の意味

動詞の連用形はそのままの形で独立の名詞として用いられる場合があり、そういった名詞は「連用形名詞」(注15)と呼ばれることがある。本節では、有対自動詞の意味的な特徴がその連用形名詞の意味に反映していることを明らかにする。

すべての動詞の連用形が独立の名詞として用いられるわけではないが、有対自動詞にも無対自動詞にもこの用法はある。

(94) 汚れのひどい洗濯物。(有対自動詞「汚れる」)

(95) 行きは三時間、帰りは四時間かかった。(無対自動詞「行く、帰る」)

しかし、有対自動詞の連用形名詞と無対自動詞の連用形名詞には次のような異なる特徴がある。まず、有対自動詞の連用形名詞には変化の結果生じた状態(「～したあとの状態あるいは物」)を表す名詞が多いのに対し、無対自動詞の連用形名詞にはそういったものは多くない。

《有対自動詞の連用形名詞》

(96) 割れ、破れ、折れ、焦げ、ふくらみ、固まり、ひろがり、腫れ、荒れ、くずれ、けがれ、汚れ、こおり、しあがり、ずれ、高まり、煮え、ねじれ、残り、まとまり、ゆがみ、ゆるみ、現れ、つながり、重なり、揃い、開き、並び、当り、集まり、納まり、乱れ、傾き、かわき、決まり、など。

《無対自動詞の連用形名詞》

(97) かたより、錆び、ぼけ、疲れ、など。

それに対して、連用形名詞のうち動作や作用そのもの(「～すること」)を表すものや動作や作用の内容(「～する内容」)を表すものは、有対自動詞には少なく無対自動詞に多い。

《有対自動詞の連用形名詞》

(98) 動き、起こり、疲れ、など。

《無対自動詞の連用形名詞》

(99) 走り、泳ぎ、遊び、がんばり、眠り、震え、うなづき、答え、暮らし、別れ、甘え、争い、戦い、ためらい、あきらめ、焦り、怒り、飽き、憧れ、悩み、迷い、酔い、衰え、降り、など。

有対自動詞の連用形名詞にみられる上のような傾向は、有対自動詞には働きかけによって生じる非情物の変化を述べる動詞が多く、動作や作用を表す動詞が少ないことの現れだといえる（注16）。

なお、動詞の連用形が名詞化することについては、西尾（1961）に詳しい論考がある。西尾のこの論考は自動詞、他動詞あるいはその対応の有無といった観点からの分析ではないが、次の点に本稿の観察と共通の特徴がうかがえる。西尾（同：70-1）では、「動詞の意味の名詞化のされ方について類型を求めた一案」として連用形名詞がその表す意味によって8種12類に分類されているが、その細分のひとつに、「〔何カガ何々シタ結果デキタモノ〕」を表す連用形名詞の類があり、その例として挙げられている「余り、固まり、氷、（点の）集まり、くぼみ」がすべて有対自動詞から作られた連用形名詞だという点である。また、宮島（1956）では、「動詞から派生した名詞」の表す意味が大きく11類に分けられているが、そのうちのひとつに「～した（結果できあがった）もの」の類があり、例として「余り、離れ、焦げ、こおり、折れ」があげられている（注17）。これらもすべて有対自動詞から作られた名詞である。

5 まとめ

以上の考察から、有対自動詞の特徴として第1章で仮説的に提案した次の二点が裏づけを与えられたと思われる。

〔1〕 非情物を主語とすることが多い。

〔2〕 働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を表すことが多い。

つまり、有対自動詞は、働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を、有情物の存在とは無関係に、その非情物を主語にして叙述する動詞であるということができる。

なお、1. 3 であげた西尾 (1979) に指摘されていた有対自動詞の性質のうち、「『所動詞』に属する性格を主とするもの」という点および「基本的には『無意志動詞』に分類される性質をもっている」という点は、主語が非情物であることの現れであり、「『結果動詞』すなわち主体に変化を生ずる動詞に所属する」という点および「『瞬間動詞』が多い」という点は、有対自動詞が非情物に生じる変化を表すことの現れだと考えられる。また「『中相動詞』というべきもの」という点は、4. 1. 2 で述べたようにある種の有対自動詞は（外力によらない）非情物の内発的な変化を表しうることと関連するものである。

注

(注 1) 調査する自動詞の総語数を多くとると、対応する他動詞のある自動詞の占める割合は低くなる。たとえば、大野・浜西編 (1981) には自動詞が約 1540 語あげられているが、そのうち対応する他動詞がある自動詞は約 580 語であり、対応する他動詞のない自動詞は約 960 語である。

(注 2) 本稿では、いわゆる複合動詞（「飛び降りる」、「泣き止む」など）、漢語サ変動詞（「発展する」、「成功する」など）は考察の対象としなかった。これらの動詞の自他対応の問題については稿を改めて考察したい。

(注 3) 「切れる、割れる、破れる」などを独立の自動詞と扱い、「飛ばす、乾かす、動かす」などを独立の他動詞と扱うことの妥当性については早津 (1987) を参照されたい。

(注 4) 自他対応の認定に関してさらに二、三の点をつけくわえておく。詳しくは、早津 (1987) を参照されたい。

第一は、いわゆる多義語についてである。多義語の場合には、その動詞のすべての意味において自他対応が成り立つとは限らない。たとえば他動詞「抜く」は、(100) b. の意味においては (100) a. と対応をなすが、(101) b. の意味においては (101) a. と対応をなさない、などの例にみられる通りである。

(100) a. とげが抜ける。

b. こどもがとげを抜く。

(101) a. * 一位の選手が抜ける。

b. 二位の選手が一位の選手を抜く。

この点に関しては、西尾（1978）に、「かかる」と「かける」を例にした詳しい論考がある。

第二は、「開く^{ヒウ}」、「閉じる^{ヒウ}」、「吹く^{ヒウ}」、「笑う^{ヒウ}」のように、他動詞としても自動詞としても用いられるものについてである。これらは二種類に分けられる。

まず、「開く^{ヒウ}」や「閉じる^{ヒウ}」の類は、自他対応をなす次のような文を作る。

(102) a. 戸が開く。

b. 子供が戸を開く。

(103) a. 門が閉じる。

b. 係員が門を閉じる。

こういった動詞を「両用動詞」とする立場もあるが（寺村 1982: 304-5）、本稿では自動詞と他動詞が同じ形をとって対応しているものと考え、上例の各々の a. の「開く」、「閉じる」は対応する他動詞のある自動詞、b. の「開く」、「閉じる」は対応する自動詞のある他動詞とみなす。

一方、「吹く^{ヒウ}」や「笑う^{ヒウ}」の類は事情が異なる。

(104) a. 風が吹く。

b. *（誰かが）風を吹く。

(105) a. * フルートが吹く。

b. 子供がフルートを吹く。

(106) a. みんなが笑う。

b. ?（誰かが）みんなを笑う。

(107) a. * 他人の失敗が笑う。

b. 人が他人の失敗を笑う。

(104)～(107)はいずれも a. と b. との間に意義的・統語的な対応が成り立たない。したがって(104) a. の「吹く」、(106) a. の「笑う」は対応する他動詞のない自動詞、(105) b. の「吹く」、(107) b. の「笑う」は対応する自動詞のない他動詞とみなす。

第三は、自動詞と他動詞が一对一に対応しないものについてである。たとえば、自動詞「抜ける」には対応する他動詞として「抜く」と「抜かす」があり、また他動詞「起こす」には対応する自動詞として「起きる」と「起こる」があるなどの例である。こういった現象に関しては須賀（1981）で、「併存」する自動詞あ

るいは他動詞の意味的な差異を明らかにする試みがなされている。しかし、ほとんどの併存例は本稿の考察においてはその差異を考慮に入れる必要がないと思われる。

(注 5) 宮島 (1972)、西尾 (1978)、須賀 (1986) などにもある程度の言及がある。

(注 6) 西尾 (1978) では「中相動詞」に関して金田一 (1957) が参照されている。金田一は、ヴォイスのひとつとして「中相態」を設け (他は能動態、受動態、使役態)、「コンナ字ガ書ケテシマッタ」の「書ケル」を「書く」が中相態をとったものとした (同:235-6)。中相態とは「受動的な意味をもった、受動態ならざる自動詞」 (同:239) だという。そして、動詞の中でそのままの形でつねに中相態のように用いられるものを「中相動詞」としているようであるが、明瞭な規定はなされていない。したがって、西尾のように有対自動詞を「『中相動詞』」というべきものだとも言われる。」と結論づけるには多少の疑義が残る。ただし、「中相動詞」の例として金田一にあげられている「煮エル、売レル、クズレル、キマル」の例はいずれも有対自動詞である。

(注 7) 「所動詞」については三上 (1953) を参照。

(注 8) 「結果動詞」について、西尾 (1978) では高橋 (1976) の引用とされているが、高橋 (同) には「結果動詞」について述べられた箇所は見あたらない。ただ高橋 (同:125) に、「～ている」形の表す意味のひとつとして、「うごきがおわったあとにうごきの結果としてうごきの主体の変化した状態がつづいていることをあらわす」ものがあるという指摘があるが、これと藤井 (1966) の「結果動詞」の概念との関係は必ずしも明らかでない。

(注 9) 「瞬間動詞」については金田一 (1954) を参照。

(注 10) この類の動詞には金田一 (1954) の分類における「状態動詞」あるいは「第四種の動詞」に相当するものが多い。

(注 11) 宮島 (1972:422,426) でも、「驚く」は「有情物の無意志動作」であり、「助かる」は「本人の力ではどうしようもないもの」とであるとされている。

(注 12) 藤井 (1971) の例のうち次の例は有対自動詞の使役形の例といえる。なぜなら、自動詞「固まる」と他動詞「固める」は形態的・意義的に自他対応をなし、かつ自動詞文「セルロースが固まる」に対応する他動詞文として「セルロ

ースを固める」を考えることができるからである。

(108) セルロースを薬品でとかし細い穴からおし出して固まらせたもの。

(藤井 (同:16)の例。番号は本稿の通し番号、下線は藤井では傍点の部分。)

この例は本文の (58), (59) と同様、「セルロース」を自ら「固まる」能力・本性のあるものとして有情物のようにとらえたものと解釈できる。

(注13) 非情物が主語となる自動詞として他に「(風が)吹く、(釘が)錆びる、(夜が)明ける、(夜が)更ける、(時間が)経つ、(空が)曇る、(水が)溢れる、(食物が)腐る、(稻が)枯れる」などがあるがこれらもやはり、たとえその現象が迷惑なものであっても、受身形で表すのはいずれもかなり不自然である。

(注14) これらが不自然だというのはこれらを文脈から切りはなして考えている場合にそう感じるのであって、勿論ある文脈のなかでは不自然に感じられないことがある。

(注15) 動詞の連用形が独立の名詞であるか否かは明確でない場合も多い。たとえば橋本 (1934) では、「演説を聞きに行く」の「聞き」は独立の連用形名詞ではなく単なる動詞の連用形の用法の一つだとされている。他にも、「彼は泳ぎがうまい」、「行きは三時間かかった」の「泳ぎ」、「行き」は独立の名詞かどうか必ずしも明確でない。本稿では、『新明解国語辞典』(三省堂)に独立の項としてあがっているかどうかを一応の目安にした。

(注16) ちなみに、他動詞についても、有対他動詞、無対他動詞のいずれからでも連用形名詞が作られる。

(109) 住民票の写しをとる。(有対他動詞「写す」)

(110) この算笥はつくりが雑だ。(無対他動詞「作る」)

そのうち「～した結果生じた状態あるいは物」を表すものには次のようなものがある。

《有対他動詞の連用形名詞》

あわせ、写し、定め、備え、設け、など。

《無対他動詞の連用形名詞》

あつらえ、考え、貯え、包み、結び、塗り、など。

また、動きや作用そのもの（「～すること」）を表すものや、「～する内容」を表すものには次のようなものがある。

《有対他動詞の連用形名詞》

直し、など。

《無対他動詞の連用形名詞》

売り、いじめ、押し、調べ、営み、盗み、行い、考え、思い、教え、
願い、疑い、望み、祈り、訴え、脅かし、など。

（注17） 宮島（1956）では連用形名詞の例はすべてローマ字表記である。

参考文献

- 青木伶子。1977。「使役－自動詞・他動詞との関わりにおいて－」『成蹊国文』10。
青木伶子。1980。「使役表現」国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版。
市川隆二。1984。『日本語動詞の研究』武蔵野書院。
大野晋・浜西正人編。1981。『類語新辞典』角川書店。
奥田靖雄。1983。「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房。
奥津敬一郎。1967。「自動化・他動化および両極化転形」『国語学』70。
川瀬生郎他。1986。『日本語教育用学習辞典の記述法に関する研究』昭和59～60年度文部省科学研究費補助金一般研究（B）。
金田一春彦。1954。「国語動詞の一分類」『言語研究』15。金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。1976。
金田一春彦。1957。「時・態・相および法」『日本文法講座Ⅰ総論』明治書院。
国立国語研究所編。1964。『分類語彙表』秀英出版。
国立国語研究所編。1971。『動詞・形容詞問題語用例集』秀英出版。
国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室編。1983。『プログラム教材＜資料＞自動詞と他動詞との派生対応』。
阪倉篤義。1966。『語構成の研究』角川書店。
阪倉篤義。1974。『改稿日本文法の話』教育出版。
佐久間鼎。1936。『現代日本語の表現と語法』厚生閣。
島田昌彦。1979。『国語における自動詞と他動詞』明治書院。

- 須賀一好. 1981. 「併存する自動詞・他動詞の意味」『国語学』120.
- 須賀一好. 1986. 「自動詞・他動詞」『国文学解釈と鑑賞』51巻 1号.
- 高橋太郎. 1976. 「すがたともくろみ」. 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 時枝誠記. 1950. 『日本文法口語篇』岩波書店. 改訂版, 岩波書店. 1978.
- 成田徹男. 1983. 「格による動詞分類の試みー自然言語処理用レキシコンのためにー」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究ー5ー計算機用レキシコンのためにー』情報処理振興事業協会.
- 西尾寅弥. 1954. 「動詞の派生についてー自他の対立の型によるー」『国語学』17.
- 西尾寅弥. 1961. 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43.
- 西尾寅弥. 1978. 「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国語と国文学』55巻 5号.
- 西尾寅弥. 1982. 「自動詞と他動詞ー対応するものとししないものー」『日本語教育』47.
- 仁田義雄. 1983. 「アスペクトについての動詞小レキシコン」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究ー5ー計算機用レキシコンのためにー』情報処理振興事業協会.
- 仁田義雄. 1986. 「格体制と動詞のタイプ」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究ー7ー計算機用レキシコンのために(2)ー』情報処理振興事業協会.
- 野村剛史. 1981. 「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』11.
- 橋本進吉. 1934. 『国語法要説』明治書院.
- 早津恵美子. 1987. 『他動詞と自動詞の対応について』東京外国語大学大学院外国語学研究科修士論文.
- 藤井正. 1966. 「『動詞＋ている』の意味」『国語研究室』5. 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房. 1976.
- 藤井正. 1971. 「『広げる』と『広がらせる』」『山口大学教育学部研究論叢』20.
- 松下大三郎. 1923. 「動詞の自他被使動の研究」『國學院雜誌』大正12年12月号.
- 松下大三郎. 1930. 『改撰標準日本文法』中文館書店. 復刊, 勉誠社. 1974.
- 三上章. 1953. 『現代語法序説』刀江書院. 復刊, くろしお出版. 1972.

- 水谷静夫. 1982. 「現代語動詞の所謂自他の派生対立」『計量国語学』13巻 5号.
- 三矢重松. 1908. 『高等日本文法』明治書院.
- 宮島達夫. 1956. 「動詞から名詞をつくること」『ローマ字世界』昭和31年 1月号.
- 宮島達夫. 1972. 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.
- 宮島達夫. 1985. 「ドアをあけたが、あかなかった」『計量国語学』14巻 8号.
- 望月世教. 1944. 「国語動詞に於ける対立自他の語形に就て」『橋本進吉博士還暦記念国語学論集』岩波書店.
- 本居春庭. 1828. 『詞の通路』. 島田昌彦『国語における自動詞と他動詞』明治書院. 1979.
- 山田孝雄. 1908. 『日本文法論』宝文館.
- 吉川武時. 1976. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房. 1976.

(はやつ えみこ, 博士後期課程)